講演

毛皮國本の國家（上）

文學博士　坪井九馬三

東山趣味を以て特色とする京都の地に於て、私が此處に毛皮の事を引つ張り出しましたのは、甚だ以て當地に對して無禮であるかの如く御考へかも知れませぬが、由來東夷の一人たる私でありまして。（笑聲）據ろないのである。惡しからず御宥恕を願ひたい。

私は寔に不思議に思ふのでありますが、此毛皮といふものは、我が國民心理に殆ど接觸點のないものであります。又從ひまして國民に頓と毛皮の趣味がないのである。全體毛皮といふものは、どちらかといへば武張つたものでありまして、從て武人側のものであります。我が國民は古より武張つた方でありまして、古典を見ましても、弓とか矢とか太刀とかには朝廷の寶物となつて居るものは澤山ありますが、其寶物の中に、それ等に對して當然の附屬物たるべき毛皮が出て來ないのは實は甚だ不思議なのであります。エウロッパ方面に於ては、毛皮なるものは武張つたものと致して武人に愛せられまして、從て勇武の相を示さむが爲に之を用ひたといふことが記錄に明かであるので

あります。勿論武事のみに用ひられた譯ではなく婦人が綺羅を飾るときにも用ひましたがそれも矢張り武張つたまね事をして粧飾と致したのであります。本邦に於きましては、はるか後世になりまして、太刀や槍の投鞘として用ひられた位が關の山、或は陣中の敷皮などにも用ひられましたけれでも、それを別としましては、德川家康の熊の毛皮の甲冑などが、よほど毛變りの變り物であると見なければならぬやうな次第です。（笑聲）よほど變チキリンなものとせられて居るのであります。德川家康は御承知の通り田舍漢を以て自ら任じた人で、東夷を代表して、熊の毛皮を用ひたのは、尤も至極と思はれます。（笑聲）諸君は搢紳の御歴々であらせらるゝ、衣冠を整へ笏を正してお陣に御着座なる御前に東夷の私が毛皮を持出すといふことは甚だ怪しからぬ譯ではあるが、又却て對照が面白いかも知れぬと思ふ。（笑聲）

そこで國本といふことでありまするが、申上げる迄もなく國本とは國家を維持する所以の本でありまして、それには精神的の本と物質的の本との兩方面がありまするが、茲に申すのは物質的方面の本であります。由來國本といふ詞は精神的の本に對しては常例用ひませぬ國本といへば大抵物質的の場合であるかの如くに考へます。私のはやはり其意味に於ける國本でありまして即ち經濟方面の國家維持の本であります。國本といへば常例農業とか、商業とか、工業とか、場合によりましては漁業も國本となることがあります。鑛山業や牧畜業はいふまでもない。然るに此毛皮なるものが經濟上の國家維持の本になるといふことは、古も今も多くない事でして、先づ以て珍しい例であります。本邦に於ては固より毛頭痕跡もない事であります。故に從來國史家は頓と此方面に注意を致しませぬ。當り前の事で、少しも關係がない

から注意をしないのであります。（笑聲）注意すべくもない筈でありまする。而して此注意に及ばなむだのが、即ち樺太、千島、カムチヤツカを失うた所以でありまするぞ。

然るに世界の廣い舞臺から歴史を見まするといふと、毛皮は確かに一の國本となつて居る。尤も是は除外例に屬する場合でありませう。而して何れの國に於て之れがあるかといひまするとゝ、先づ歴史年代に於て古く申しまするならばロシアであります。ロシアは毛皮を國本として起つた國であります。尤も後になつて止めました。又毛皮國本と申しましても毛皮ばかりが國本でない。國本の一斑が毛皮であつた。他の一斑は別のものであります。併し斯ういふ事は滅多に例のないよほど風變りな事であると謂はなければならぬ。ロシアは絶ねず毛皮を輸出して居りました。今日も或意味に於てそれが續いて居るといつてよい狀態でありまする。併し段々ロシアの毛皮は國本たるを失ひつゝある。

徹頭徹尾毛皮を國本として國を起しまして、今も尚ほ國本といふだけの程度に於て毛皮の盛でありまする國がある。それは即ちカナダといふ國でありまする。カナダは毛皮のみが國本の國でありまして、他に何等の主産物がなかつたのであります。故に毛皮國本の國として擧示致しまするならば、先づ以てカナダであります。カナダが第一位である。ロシアは今も言ふ通り他の物も傍にありまするで、國本と申しても、其程度は、カナダに對する程ではありませぬ。而して是は、ロシアといふよりも寧ろシベリアといつた方がよろしい。シベリアならば徹頭徹尾毛皮國本の國であります。廣く之をロシアといふときは、寧ろ毛皮は一部國本といふべきでありませう。依て、或意味に於てマア、カナダとシベリアといつて置けば安全でご

ざいませう。其他の國に斯ういふ例があるかと申すと、先づ無いと申してよろしい、カナダとシベリアだけでありませう。他にはありませぬ。

そこでカナダの事を一寸申上げる。カナダといふ處は、先づ大體に於てシベリアと同じ樣な地勢になつて居ります。地質の側からいひましたならばどうありませうか、私の專門外で存じませぬが地勢からいひますとカナダとシベリアとは能く似た地勢でありまして、寧ろカナダの方が一層複雜になつて居るのであります。シベリアの方はよほど單純であります。河筋が一概に南より北へ北極洋の方へと流れて居ります。皆廣大なる河でありまする。比較的小さな河でも、それ自身を獨立して考へるならば、頗るの大河である。カナダ方面にも頗る大河は澤山ございまするが、必ずしも皆北へ向つて朝して居りませぬ。又其河筋が色々樣々に入り亂れて居りまして、さうして湖水が無數にございます。而もそれ〴〵皆大きな湖である。其連絡が又不思議なやうに混雜して居る。是があの國の發展上に與かつて力をなすのであります。

そこで、申上げる迄もない事でありまするが、順序でありまするでどうしても申上げぬ譯にいきませぬから申すのでありまするが、先づ必要なものだけを申すといふと、凡そ斯ういふ事になりまする。大體に於てカナダの國は、水脈の上からいひまして三つの方面に分れる。それはどういふものであるかといふと、一はセントローレンスの水脈であります。即ちシユペリオル、ミチガン、ヒウロン、エリイ、オンタリオの五大湖を聯絡して其湖からセントローレンス灣に向つて流れて居りまする此水脈、これは大体に於て西から東へと流れて居ります。是が一つ。次にサスカチエワンといふ大きな河があります。やはり湖に落ちまするが、これは餘程複雜になつて居る河でありまして

かのウイニペグ、ウイニペゴシス、マニトバの三湖がごつちやの樣にかたまりました處に落ちましてさうしてネルソン河といふ名前になつて、ハドソン灣に入りまする。これは大体に於て東北の方向を取りまする一つの水脈であります。ロッキイマウンテンスに源を發して東北の方向を取つて居ります。是が一つ。それから第三は、やはりロッキイマウンテンスに水源を發して居りまする河がありまして、アサバスカといふ大きな湖に落ちます。アサバスカ湖から更に河が出まして、又いくつも湖を聯絡して北氷洋に朝します。これがマツケンジイ河の水脈でありまして、北に向つて居りますそこで所謂カナダといひまするのは此三つの水脈の地であるのです。そして此三つの方面が各歴史を異にして居る。拓殖の顚末も皆一樣であるにも拘らず少しづゝ違ひます。それから又申すまでもない事でありまるが、かのロッキイマウンテンスはよほど太平洋に接近して居るで、太平洋の側は一面の山國になりまして、そして其東側は一圓の平野、其の平野と山國とをロッキイマウンテンスが限つて居るのでありまする。ロッキイマウンテンスから東の方には山はないのであります。眞ッ平であるのです。そこで太平洋側に於きまする水脈ですが、是は固より東部に於けると比較になりませぬ。大体に於て申しまするならば、先づ河は二本であります。ロッキイマウンテンスに源を起しまして、それから、非常に妙な屈曲をして太平洋に入りまする。即ち先づ北に向つて流れて、それから西に曲つて、又南に向つて下りまして、さうして遂に西に向つて太平洋に朝しまするといふ實に妙な水脈、此河が二本ありまして、二本共大体に於て同じ方向を辿つて同じ海へ落ちまする。其北の方のはフレザー河と申します。其南の方にありまするのはコロムビア河と申します。コロムビ

ア河の方は下流は最早やカナダでありませぬ、合衆國になりまするが、水源はカナダであること勿論で。フレザー河は全然カナダの範圍内にあります。いづれも同じやうな屈曲の仕方を示して居ります。カナダの西部の水脈としてはまあ斯ういふやうなものであります。であるが、併し是はカナダの河の特質を持つて居らぬ。全く性質は異つて居るのです。因に申しまするが、此フレザー河は鮭の主要産地で、本邦の獵師が此處に村を作つて盛に從業致し居ることは世に聞えてまする。カナダの水脈は斯ういふ大体になつて居りまする。

そこでカナダの經營でありまるが、是はシアンプランの始めた業でありまする。シアンプランがセントローレンス河の流域に殖民地を開かうといふ計畫、尤もそれは彼の私の計畫ではありませぬ。シアストと申す宗教團体がありまして、フランス王よりカナダに於て毛皮商業を營む特許を受けて居りましたので、其理事長みた樣な役に就きまして、一六〇三年に始めてカナダに渡航しまして此處に毛皮の實業を起して、其收入を以て團體の利益を計らうといふ事から、始めて彼が此任に當つた譯でありまする。其時分には、一般に、イギリスでも、フランスでも、又其他の國に於ても皆勅許を得て、方々へ出掛け仕事をしたものであります。シアンプランも同樣の仕方で出掛けまして、セントローレンス河の下流方面を探檢しました。セントローレンスの河の落口から今のモントリオールの邊まで、此間の両岸の地方經營に掛つたのです。即ちセントローレンスの下流両岸地方、此處を當時カナダと申したことである。極狹い地方です。セントローレンス下流の地のみであります、モントリオールより下の方でありまする。其両岸の地。其處の經營を創めました。初めから毛皮の商業をしやうといふ企ではありましたが、自分等

自らが進んで毛皮を採集するといふのではなくして、それも幾分やりませうけれども、それは本來の目的ではありませぬ。何かといふと、土地の人民が始終狩倉を致して毛皮を取ります。其等の取ります所の毛皮を買集めて、さうしてそれをエウロッパへ輸出しやう、斯ういふやうな計畫であつた。そこでケベックに本部を置きまして、其處を本陣として仕事に掛つたのでありました。

これが抑々の始りでありまするが、扨、何故に初めから毛皮採集といふことに掛つたかといひまするとと、先づ極寒地に就いて其概要を申上ぐるならば、何さま氣候の非常に寒い處で、穀物は無論出來ず、よし作つて見た所が先づ大麥ぐらゐのものであらう、それも、出來る年もあれば出來ぬ年もあるであらう。大麥に次いで確かなものはライ麥であらう。是はロシアが原産地であります。これが大麥に次いで出來るものでせう。尤も此外に

土地に野生するマコモが實のります、周の時代の所謂菰であります。內則に魚宜笋と申し陸放翁が萬里秋風菰米老一川明月稻花香と吟じた菰米でありまする。それから野菜物ではカブラぐらゐがマア出來るのでせう。それから西洋ワサビ、あれがマア幾らか出來ませうが、それから豆類も少しばかり取れませうが、それからボタンナでありまするが、是は極寒地でも南の方へ行きましたなら玉になりませうが、普通には玉にならない、只葉が出るだけの事でせう。何れに致しましても、ヨシ出來て見た所で甚だ水ッぽい、味のない、至つておいしくなく、感心しない野菜物である。それ位しか出來ませぬ。但し秋の末まで鴈鴨の類が澤山に居りませうで、豫て之を精々狩取りまして、あり餘るほど干物にして貯へますれば肉には差支ありませぬ。兎に角に土地に於て人々が常食とすべき所の食物は頓とない處であります。何處へ行つ

てもあり餘る物は、岩と雪と氷のみである。又斯ういふ處でなければ良い毛皮は取れぬのでありまする。お負にそれは冬でなければいけませぬ。夏は毛皮狩に行つても駄目であります。毛皮は取れましても役に立ちませぬ。

そこで毛皮の取れる動物はどういふ處のものであるかといひますれば、極寒の地に居るものでなくては駄目ださうであります。極寒の處に棲む動物に限るといふ事であります。氣候が少し樂になつて來ると毛皮は直に惡くなります。同じ狐でも北極に近いアラスカの狐島、カムチャツカ半島、樺太、北海道と、段々値打が下つて來るさうであります。それ以南の狐などは、いくらあつても先づ用をなさない。値打はさつぱりない。京都邊の狐は三文の値打もありませぬ。(笑聲) 只捨る位のものでせう。(笑聲) 毛皮といふものは然ういふものなんです。それでありまするで、全體暖かい國の、極めて色々な物が出來易い國に居つけました日本人に取りましては、右申しまするやうな、岩と雪と氷だけが澤山あつて外に何物もないといふやうな事は、見たこともなし聞いたこともない。恐らく夢にも見たことはなからう。併しそれは決して無理でないので、日本はさういふ國でないのだから、成程知らぬ筈である。知らぬのは當り前の事なんです。だから況してやそんな處へ行かうとする料見は天でない。あゝいふ寒氣の嚴しい、不便な、岩と雪と氷とが到る處にある外何物もないといふやうな處に限つて毛皮は出來るものである。日本のやうな極樂に均しい處には毛皮は出來ない譯である。併しさういふ寒い處でも、やはり處に依りまして良い毛皮と惡い毛皮とが取れますどこそこの毛皮は上等、どこそこのは落ちるといふ事が始終ある。何れにしましても、今申したカナダとシベリア、それも極北の方の一部分、此両

方面であります。此両方面が世界の毛皮主産地でありまする。斯ういふ、殆ど人間の住ふことの出來ないやうな處。

さて、前に戻りまして、斯ういふ、人間の住ふことの出來ないやうな處、不便な處に向つて經營を始めたのでありまして、從て此經營が非常に難しいといふことは想像するに難からぬのである。寔に初めから非常な難しい條件である。其條件を何とかして具備しなければ仕事が出來ないといふことは言ふ迄もない。それを彼等は工夫をしたのでありまする　先づ日本人の頭腦ではさういふ工夫は附きますまい。今日の日本人ならば工夫も附きませうが、古の、江戸幕府時代の日本人には、迚も思ひも寄らぬ事、夢にも入りますまい。斯ういふ不毛の土地を、しかも寒い處を、不自由な處を、どうして經營することが出來るか、斯ういふ大問題である。東山時代の義政などは數寄の道には聖人でも無論かういふ事には考へも附かなかつたでせう。（笑聲）

然らば彼等はどういふ工夫を凝して此至難の條件に當つたか、其極大略を申上げると、詰り斯ういふ譯であります。先づ住居より申しませう。イギリス語でフオルト（fort）フランス語ではフオール（fort）ロシア語ではオストログ（ostrog）と申す建物。それはどういふものであるかといふと、住宅と城塞とを兼ねたものでありまする。即ち住居なり城なりであります。住居と城を兼帶の建物である。それは勿論木造でありまして、あぜくら式に切込むで材木を積み重ねまして、其間の隙間のある所には苔なり何なりを詰めまして、さうして其上に泥を塗ります。風が通はぬやうにして置けばそれでよろしい。極々お粗末な校倉式の建物であります。木はトヽマツでもカラマツでも何でも宜しい。大袈裟にひきわり成るべく厚いの

が宜しうございます。削る必要はありませぬ。其儘でよろしい。隙間さへなければよいのです。だから木を成るべく能く合せて、隙間を埋めて置けばそれでよろしい。壁はそれとして、天井も床も一寸以上の厚板で張ります。隙間は大の禁物である。屋根も相當嚴重にしなければならぬ。屋根を拵へまして、其上に草か土かを澤山積んで置けばよろしい。體裁などは毛頭要らぬ。防寒一邊である。意匠などは何等凝らす必要はありませぬ。東山義政のとは正反對の建築であります。（笑聲）野暮の骨頂の建築なんです。（笑聲）此建物の內部に於きまして朝鮮式の溫突――ロシア、ドイツ語でカミンKamin　フランス語でシユミネーCheminée と申します。イギリス語はありませぬ。フランス語より參つたチユネイは煙出し（煙突）の義と意味が變はりましたが、元來此語はギリシア人が用ひましたものでカミノスと申してエウロツパ北部一圓に當時行はれましたと見ねまする。全く朝鮮式の暖爐でありまして、熱い煙を室壁に通して室內空氣を暖むる裝置でありましたのを、後世に至り炭燒竈の裝置に改めまして、屋根裏に出づる煙出しを附けたる長方形煉瓦作り、壁を一尺以上にも厚くしまして、其表面を美しい文樣つきの陶器板を以て張り上げ、其內部には鐵製の竈と竈と煙出しとの境に百八十度を廻轉する鐵製の密閉瓣を裝置しまして、普通には薪を燒きまするが、薪が燃ねて概ねおきとなる頃を見はからひ外に出である密閉瓣の取手を廻はして煙の屋根裏へ出づるを閉鎖致します。かく致せば熱氣漸次に爐壁より室內空氣に及びまして、假令窓外は積雪に埋まるとも、室內には春暖くして袷着で適當であります。本邦に於きましても福井長野福島以北の地方にあつては此カミンが必要でありまする。カミンの要する面積は室內面積の凡そ壹割であります。――を

着けます。それでも寒ければストーブを焚きます（笑聲）さうして此建物の内に住む。併し只此内に入つて居るだけではいけませぬ。なぜかといふと、土地の住民に對する難しい關係がありまする。土地の住民即ち土人でありまする。尤も是は處に依る事でありまするけれども、アメリカ北部に居りまする土人は甚だ慓悍であります。啻に慓悍なるのみならず、彼等は詐の謀を設くることが非常に巧でありまする。油斷も隙もなりませぬ。此土人を相手にしなければなりませぬ。之を相手にして、之と商ひをなして、依て利益を得るといふ事を目的にして斯ういふ土地へ行つて居るのでありまするで、始終彼等土人を向ふへ廻して働かなければならぬのでありまする。從て相當膽力智慮のあるものでなければ、腰の弱い人間の行ける處でない。又身體も頗る強健でなければ、寒さにめげるやうな者であつたならば、あゝいふ寒い處では一冬に死んでしまふ。さういふ厄介な土人の住んで居るさういふ厄介な氣候を持つた土地です。（笑聲）實に慾とふたり連れでなければ行ける處でありませぬ。あそこの土人は寔にさういふ獰猛な厄介者です。同じ土人でも、シベリアの方へ行くと然うではありませぬ。ヤクートでもツングースでもカムチャダールでもアレウトでも穩な人民で、おとなしいやうであります。勿論こちらから餘りの亂暴狼籍をすれば彼等だつて怒ります。それは何處だつて然うであらうことは言ふ迄もありませぬ。（笑聲）こちらが當り前にしさへすれば、決してアメリカの土人のやうに、詐謀を構へて人を陷れるの殺すのといふやうな事は致しませぬ。マアよほど氣樂な土人です。それがアジアの北部に居る土人アメリカのはそれと全く違ふのであります。そこで經營者は先づ右樣の困難に當らなければなりませぬ。即ち自然に對する所の對抗力と、それから

土地の住民に對する對抗力との、両方面の抵抗力が要ります　思慮にも富んで居らなければならぬし、身體も健全でなければならぬ。相當なる腕力を具へて居ることも必要である。斯ういふ條件が要ります。此條件が缺けて居つてはアメリカへは行けないのであります。

そこで、住居には今申すやうなものを造りましても、扨それのみでは防禦が出來ぬ。防禦の事をやらなければならぬが、其防禦としてはどういふ事をするかといふと、所謂柵ですな。柵を其周圍に設けます。其柵の設計は圓からうが四角からうが、形はどうでもよろしい。併し常例は圓形或は四角形です。周圍一面にさういふ柵を造る。先づ理想的のものを云ふならば、ピラミド形即ち圭狀に材木の光を削りましてそれを地面に立てるのですが、其地面から出て居る分が九尺なければならぬ。高さが九尺、併し九尺と申しましても、必ずしも九尺に限つた譯ではありませぬので、雪の積る度合にもよります。飛越すことの出來ぬやうな柵でなければ效をなしませぬ。故に雪の積つた時の事を考へに入れなくてはなりませぬ。雪の積つた上へ乘つて、其所から、たやすく越されては何にもならぬ。よほど高いものにしなければならぬ事になります。で、假に雪がないものとすれば九尺の高さの尖つたものを拵へる。材木は何處にでも幾らもあります。材木の心配には毛頭及びませぬ。方々に森が澤山あります。アラスカ方面にはさうもないですが、カナダ方面には澤山あります尺角位の桟木を拵へて、さうして上を尖らせまして、下は成るべくガタ附かないやうに、地面に深く喰込ませて、隙のないやうに立て列ねる。さうすると非常な堅固な木塀が出來ます。別に意匠が拙くあらうと、恰好が惡からうと良からうと、そんな心配もなければ、所々狹間を設ける必要もな

い。丈夫でありさへすればよろしい。それから、大抵は四ケ所でせうな、處によつては二ケ所でもよろしいでせう。櫓をかきます。是は常例五角或は六角形です。校倉風に、四本なり五本なりの柱を立てゝ、其間に材木を積むのです。材木を積みまして、そして其上に板を張り敷いて、上を平にする。平にした上へ大砲を置くのであります。表からは入口がない。圍の中から登るやうに梯子を附けます。上には大砲を据着けて置く。斯ういふ工合です。相手が相手でありますから木で拵へた大砲でもよろしい。必ずしも鐵には及ばない。木で拵へても何で拵へても、相手を驚かすことに間に合ひますればそれでよい。兎に角さういふ大砲を二門でも三門でも十門でも、多い程有效であります此砲手も相當に備へて置かなければならぬ。其等は入用次第、又此以外に鐵砲なり刀槍なり、それ〴〵入用な物は相當に準備しなければならぬ。さういふ建物で、そこに司令官の住居も要れば、將校の住居も要る。又下士卒の住居も要る。それから土人との取引を掌る方の側の人も數名要る。それ等の住居も要る。通譯人も要る。色々樣々の人及び住居が要ります。貨物、兵器、糧食、被服、薪炭などを貯藏する倉庫、物置の數棟が要ることも勿論でありまする。又野菜物が出來るならば畠をも作らねばなりませぬ。それで何れにしましても此所謂城塞兼住居は相當の大きさを要するのであります。尤もそれは必要に應ずべきもので、必要がないのに馬鹿に大きな建物を拵へることも考へ物であります。で、大きいものを拵へる場合もあれば、小さいものを拵へる場合もありまして、素より一概に申すことは出來ませぬが、兎に角さういふ形式の建物である。シアンプランは此本陣をケベックに置いたのでありまする。さうしてそれは相當大きなものでありました。其所を中心

として色々仕事をしたのであります。行先々々と必要な場所には此陣居を拵へる。さうして其所に住む。これがなければ何も出來ぬ。此内に入つて居つて、土人共が攻撃して來ると之を追ッ拂ふ。さうして内に畏まつて引込んで居る。用のある時には十分用意して彼等土人に捕へられて酷い目に遇ひます。だから十分に彼等を撃退するだけの武力を持たなければなりませぬ。さういふ事をして經營をやるのです。なか〳〵の覺悟を要します。

そこでシアンプランでありまするが、彼は今申す通りセントローレンス河の下流方面に手を着けまして、ケベックに自分の根城を搆へたのです。餘り遠くまでは毛皮採集に行かぬ。下流両岸地方の採集しかやつて居りませぬ。土地が南よりだけに氣候も樂ですし、地味も好くて、土人はタウモロコシとキクイモを作つて居ました。カナダの基礎を置いた者はシアンプランでありまするが、僅かに其邊にしか發展してゐないに拘らず、フランス人の勢力がなか〳〵に張つて居りますのは寔に是れ案外千萬に思はれます。それはどうしてやつたかといふと、雜婚であります。此雜婚の方法は他の者もやりましたが、殊にフランス人は盛にそれをやつたのでありまして、土人の娘を娶り、或は入聟となつて、土人の言葉を使つて、土人の間に交はり住みながら、毛皮採集をやる。さうやつて彼等は働いたのであります。そこでフランス語が彼等土人の間になか〳〵廣く行渡つて居ります又其間に生れました子供、即ち混血兒でありますは是が非常な有力なる楔子となつて、お互の間を圓滿に連結して居る譯でありまして、そして之が又主なる働き手になつて居る。両方の性質を具へて居りますので、頗る之が都合がよろしいのである土人の言葉は母讓りで心得て居るし、フランス語も父讓りでよく判る。さういふ所から非常に此混

血兒が重寶な役目を持つて居るのでありまして、今日でもカナダ人民の過半數は此面々の子孫に求める狀態であります。

所で以上はセントローレンス河の水脈の拓殖でありまするが、シアンプランはどうしたものでありますか、それから先へは伸びなかつた。其邊に止まつて居りました　所が茲に競爭者が出て參いつた。それはシアンプランの時代より餘程後で半世紀以上もをくれます。それが妙な事から起りました。有名なハドソン灣會社といふのが是であるかのハドソンベイといふ廣大なる灣がありまするが、あれはイギリスの航海者ヘンリイハドソンの發見した所である。そこで此發見者の名を取つてハドソンベイといふのでありまするが、此會社の名稱はどういふ來歷であるか判りませぬが、之を要するに會社の名前としてはハドソンスベイコンパニイと致してあります。地理上の名稱ではハドソンベイといふ。それを特にさういつてるのは何故であるか、私は知りませぬ。所で此會社でありますが、是が今日のカナダを興した本元であります。シアンプランが基を築いたのではありますけれども、彼はセントローレンス河の下流に止まつて居まして、シユペリオル湖の探檢さへも出來なかつた。それの出來たのはよほど後である、シアンプランは下流方面から些とも進みませぬ。先へ行つて居らぬ。先へ進みましたのはモット後のことであります。又シユペリオル湖の探檢が出來るとモット先へ行くのかと思ふと、先へ行きませぬ。南へ行つてミシヽツピ河の方へ行つて居ります。北へも西へも進んで居りませぬ。さういふ譯でフランスは一向其外へはみ出して參りませぬので、それが恰度ハドソン會社の起りまする原になつて居る。これが一寸面白いのです。イギリスの仕合せといつてよいか、フランスの不幸といつてよい

か、兎に角マア次に申上げるやうな顚末で始まつたのであります。

是は十七世紀の中頃の事でありまするが、カナダに毛皮がとれて儲かるといふので、本國の喰詰者がカナダへ出掛ける。毛皮業をやつて身代を拵へやうといふので出掛るのである。其内の二名の者でありまする。ラヂソンといふ者と、それからグロセイエーといふ両人の者でありますが、其者に就いて御話をせんければ分りませぬ。是は斯ういふ事であるのです。此両人は元々他人ではあるが、グロセイエーがラヂソンの妹を娶りましてお互に義理の兄弟といふことになつて二人して共同事業をやりました。彼等が西の方へと毛皮獸狩或は毛皮買入の爲に出掛けたのでありまするが、扨これには前以てケベックに居りまする知事の許可を受けなければならぬ。然して後に出掛けなければならぬ。當時出掛けるのは隨分危險です。下手をやると土人に打殺されます。よほど用心して行かなければならぬ。土人が向つて來れば默つて居る譯にはいかぬ。何とか之に對抗しなければならぬ。それに就いては相當の準備が要る。武力が要ります。ナニ土人一匹位生擒にして捕まへて來ればよいといふやうな單純な譯にはいかぬのである。それで知事も成るべく愼重の態度を執つて、大丈夫と見た上でなければ容易に許可せぬ方針である。此兩人の者が知事に願つたのでありまするが、許可が出なかつた。所で両人の宗旨は基督新敎であ る。フランス人でありながら新敎徒です、そこで政府が嫌つて、新敎信者の我々であるから知事の奴許可を與へぬのであらう。怪しからぬと酷く怒つて、無斷で飛出して、さうしてシユペリオルの湖の北の方にニピゴンといふ湖があります。此方面の毛皮獸狩に行きまして、可なり毛皮を採集して歸つて來ました。所が歸つて來ると、法を犯し

たといふので裁判所へ喚出されまして、結局の所両人共破産しなければならぬやうな巨額の罰金を科せられました。そこで両人の者が非常に立腹しまして、さうして、こんな馬鹿な裁判には到底服從することが出來ないといふので、態々フランスまで歸りまして控訴致しましたが成功せぬ。そこで両人無念やる方ない。當時イギリス領に於きましてはボストンが一番商業が盛でありましたので此ボストンに寄りまして、土地の豪商等に說いて見た。何といつて說いたかといふと、我々はハドソン灣の方面へ行つて毛皮採集をやつた來た。頗る有利である。是は永久共に繁昌するに違ひないおやりなさい。私が御案内する。と斯う言つた。實は併しハドソン灣へは行つてゐないのです。なぜかといふと、ラヂソン自筆の日誌が現に遺つてますが、其日誌によると當時ハドソン灣へは行つて居りませぬ。併し自分達の行つた處から凡そ何日位でハドソン灣へ出られる、どの位の里數があるといふことは土人などから聞いて居る。それで自ら行つたのではないが、其聞いた事を、豪商を遊說する時分に機宜として自らが行つたかの如く饒舌つたのである。さうするといふと、ボストンの豪商共は若干名乘氣になつて、船を用意し、愈出掛けて見ることになつた。所が出掛ると、ハドソン灣の入口までは行けましたが、其處からは何樣ひどい氷であつて、氷詰になつてしまひさうである。なか〳〵先へ進めない。迚も駄目だ、船が入りませぬといふので、とう〳〵後戻をした。両人は非常な失望落膽、大に弱り込んでしまつたのであります。弱り込んで居ると、恰も好し。イギリス本國より、ロヤル、コムミツショネルといひまして殖民地の事情を視察する勅使です。訴の廉があれば訴を聽いて其場で裁判をするといふやうな役目をする。時々さういふ勅使が立ちます。其

勅使が二名來た。両人は恰度好い人が來たといふので、自分等はフランス人でありますのでイギリスのさういふ官人に賴るのは本意でありませぬ。けれども、カナダの知事に對して不滿がある。其不滿を露す爲に、不本意ながら其勅使の一人侍從兼海軍經理局長カーテレットにお目通りをして自分達の意見を述べた見た所が、成程さういふ譯かといふので大に其說を可しとして、兎に角俺が連れて行つてやるからイギリスへ來ぬか、イギリスへ來れば何とか物になるだらうといふので、勅使が両人を連れて歸られました。時の國君はチアルス二世でありました。そこで両人はイギリスへ連れられまして、此侍從に段々賴つて、遂に拜謁まで願へることになりました。拜謁を允されましてチアルス二世より有難い御言葉を戴きました。それは朕が好しなに取計らつて遣すから心配致すなといふ時の陛下よりの御直きの御奬勵御慰問の御言葉を頂戴して、當人等は大に滿足した次第です（笑聲）さうすると民間に於きましては、第一時の陛下がさういふ風に御乘氣になつておいでになるといふので大變興味を持出した。從つて又其侍從の話で時の內閣大臣なども大分乘氣になつて居るそこで一體それはどういふ處であらうといふのでやがて御用船を二艘仕立てゝ、二人が一艘に一人づゝ上乘して、案內役として向ふことになつた。宛もヘンリイハドソンが發見して後、調度五十八年になります。五十八年以前にハドソンがこの灣を發見したのは、實に偶然でありました。所謂アメリカ廻りでアジアへ出やう、印度へ出やうといふので航海してる內に、此處へ行當つたのであるそれはヘンリイハドソンが三度目の航海で、是が最後の航海になります。眞北に向つてもよい、どちらでもよい、アメリカ廻りで印度へ出る航路を發見しやうといふので段々やつて來た所が此處へ

打突かつたのです。もう先へ出られない。そこで糧食に窮して、食物を探しに出掛たは宜いが、どういふものか其れきりサッパリ行方不明になつてしまつた。どこへ行つたか分らない。ヘンリイハドソンはさうやつて死にましたが、ハドソンが行つてから當座十八年の間は時々其邊へ行つた航海者が數人ありましたが、其後四十年は跡がバッタリ絶える。四十年の昔斯うであつたといふ事が分つてるのですが、其後頓と人が行かぬ。フランス人も行かぬ。其處へ先づ此両人が案内をした。固より両人もどういふ處か行つたことがないから知らぬのです。話に聞いたゞけです。カナダの南から北へ向つて行くとすれば何日で以て行けるといふことを人から聞いたのみであります。大膽な話であります。ラヂソンの乘つた一艘は灣の入口まで行きまして氷に遮られて能う入らぬで空しく歸りましたが、グロセイエーの乘つた一艘は遂に入り切つた。遂に灣の内に入りまして、其底に當る處に上陸しまして、時正に秋の末でしたから直にネミスコ河の畔にフォルトを石で造りまして。之をチアルスフォルトと名づけました。此河の落口に上陸致したのが一六六八年九月二十九日で、是より此河をルーペルト河と呼びます。續いて河口の沖にありまするトゞマッとヤナギの生うる島をチアルストン島と稱へまして、此處に越年して、翌六十九年四月に無事に歸國して其報告書を提出致しましたので、ハドソンスベイコムパニイは確實に成立致しました。

是はイギリスの事業として確に一つの出色のものでありまするで申上げませうが、斯ういふ事になつてるのでありまする。其勅許狀は千六百七十年五月二日付になつてます。それに斯ういふ事が書いてありまする。

先づ會社株主はルーペルト親王を筆頭に十八名

でありまするが。太弟ヨークの宮（後にゼームス二世）を始め國務大臣幷に顯貴の歷々が數多居られます。役員は總裁副總裁七名の重役より成りまして、株主一同の互選に依つて擧げられます。商事會社として普通の所有相續其他の權利義務を附せられ、社章を任意に定め又改むることが出來ます。而して獨占の商事としては "the whole trade of all those seas, straights and bays, rivers, lakes, creeks and sounds, in whatsoever latitude they shall be, that lie within the entrance of thest raights commonly called Hudson's Straights, together with all the la-nds, countries and territories upon the coasts and confines of the seas, straights, bays, lakes, rivers, creeks and sounds aforesaid, which are not now actually possessed by any of our subjects, or by the subjects of any ather Christian prince or state" 又此權利を "free and common socage" の權に依つて專有致します。

斯うある。非常に周密に書いてある。そこで、どういふ事かと申しますると、ハドソン海峽と稱する所の入口よりハドソン灣にはいつて、廣大なる灣內に諸方面より注ぎ込むで來る所の總ての水面、大河、中河、小は瀨戶、入江、湖、潟すべてのもの、而して其水筋の通ふところの總ての地方領地そこに獨占して一切に亘り營業することが出來るとある。さうしますると此ハドソン灣に入るところの河筋、何本もあります。何本もありまするが、其中の一番大きいものはサスカチエワン河であります。水源はロツキイ山脈にあります。さうして大體に於て現在のカナダと合衆國との境に沿うて東北の方向に流れまして、そしてウイニペゴシス。ウイニペツグ（一名アシニボインとも云ふ）マニトバ等の湖水を容れて、それからネルソン河となつてハド

ソン灣に朝する。是が一番大きな河、他は小さい此河を傳つて行きさへすればカナダの西南方、合衆國に接近した方面へ參ります。其處を傳つて遡りますと今度はロッキイ山嶺まで上つてしまふ。當時はカナダの探檢が些も出來て居らぬ。何處に何があるか分らぬ空漠なる、眞ッ白の、白紙同然なる地圖を机上にひろげて。どんな水脈があるか分らぬから、そこで出來るだけ周密に書いた實地を調べて見るとロッキイ山脈まで行つてしまふ。そこでセントローレンスの水脈を跳越しまして先へ飛んでズッと一圓に廣がつてる。それを空漠なる白紙同樣、何等地理上の知識なしに、どんなものがあるか分らぬが、皆行つて經營せよと、斯ういふ大マカな許可を與へた　時の陛下が、我臣民の中の誰人かの經營してる處、他の基督教の國家の實際の配下でない處でありさへすれば宜いといふ斯ういふ二つの條件を加へただけで御許しになつたのである。他に制限は何もないといふのは、フランスの經營が既に始まつて、之を目の前に置いてやることでありまする。で、其爲であります。フランスが其時分經營してる一番近い處は、新設のチアルスフオルトより凡そ六十里離れてる。六十里といふのは我國の里數に直してです。其處がフランスの現に經營しつゝある所、故に心配は要らぬ。斯ういふ考で掛つた。さうして此土地をそれ以來ルーペルトランドと總稱して居ります。カナダといのは、セントローレンス河の下流両岸の地方だけです。其他の地方はまだ無名です、ルーペルトランドとはルーペルト領といふに同じい。されば爰で此ルーペルト親王に就いて鳥渡申上げるイギリスが、暫くの間、クロムウエルの政治の下に在つたことがある。議會軍とチアルス一世との戰で、議會軍が勝利を得て、其大將たるクロムウエルが自らプロテクトルとして政を行ひました事は

イギリスの歴史に明かであります。其時の勤王方の、何といひますか、侍黨ですな、侍黨の首領はルーペルト親王といふ方でありまするが、此方はイギリス人ではありませぬ。ドイツ人でありますイギリスのゼームス一世の皇女樣、たつた一人よりありませぬが、此かたが南ドイツのファルツの國へ御嫁づきになつて居りまして、其先で御生れになつた方が數名おありになりました。其中の長男は勿論相續人、其次男です。Prinz Ruprecht von der Pfalzといふ方であります。チアルス一世に取りましては此かたは甥に當ります。二世の代に於きましては從弟に當る。そこで、次男でして、冷飯ですから(笑聲)廣い世間を家庭と心得られて本國を振棄てゝ、叔父樣の御國たるイギリスに渡られ、そこで侍黨の首領となつて戰はれ、天晴な聲望がありました。さればチアルス二世は此かたを重く用ひられまして、晩年には海軍大將で退隱しておいでになりました。恰度其時であります。此かたの御耳にも此事業の事を申入れまして。カーテレット侍從からですね、侍從から申入れまして、此かたは學問のある方でありまして、至つて物分りが早い、大層御氣に入つて、株を御持ちになつたので、そこで會社に於ては此かたを總裁に願つたのでありまする。總裁とは申しましても、仕事は無論副總裁がするのでありますけれども、名義として此方を總裁にした。是が初代の總裁です。二代目の總裁は、やはり初めから株主でおいでになりまする時のヨークの宮、皇太弟であります。それから三代目、やがてヨークの宮はゼームス二世として御踐祚がある。さて次の總裁、之を誰にしやうといふことになりまして、此總裁は立派な方々ばかり、無暗なものを總裁にする譯にいかない。朝廷の御覺ゐもよく、世間の通りもよく、地位も高く、手腕も冴ゐた、立派な方を願はなけ

ればならぬと皆がいふので、其條件に適つて三代目の總裁に願つたのがヂオン、チアチル卿即ち後のマールボロウ公爵でありました。初めの三代とも皆斯ういふ人ばかりです。素敵滅法に仰山な金看板を掲げまして、其下で以て藝當をやらうといふのである。併し是は無理もないと思はれるのは向ふにフランスが控へとります。其フランス側でどう言つてるかといふと、斯う言つてます。北は北極よりですな。アトランチックの側に於ていへば、南はイスパニオラの嶋の線、パシフイックの側に於きましては、南はカリフオルニアの線、此線内は全部フランス領たりといふことを宜言した勿論机の上の議論です。所でイギリスは無論承知せぬのです。それはいけない。承知出來ぬ。机の上の空論を立てゝ、何處其處は俺の領分だとあつても承知罷りならぬ、實際其土地の管理をやつて居られ、行政を執つて居られぬ以上は、當方では承認仕らぬ、實際の政務を御執りになつてるならば、いかにも承認仕らう、机の上だけの御言葉は承諾仕らぬ。イギリスは斯う斷言した。フランスの向ふを張つて、そしてこんな事業を平氣でやつてるのです。ですからフランスも默つて居りませぬ。なか〳〵むづかしいのです。ドシ〳〵競爭で仕事をやる。殊にユートレヒト條約前後の頃にフランスのルモアンヂベルビーユ兄弟の爲に手酷くやつゝけられました。其後に至り十八世紀の終り頃になりまして、此會社存外仕事をせぬウイニペグマニトバの湖邊の經營をやる切りでサッパリ手を擴げませぬ。印度へ向ふべき航路の探檢をしなければならぬのでありまするが、其事業をもやらないで、色々なる非難が起りました。非難百出、利益を獨りで壟斷して居りますものですから色々な攻擊が出ます。とう〳〵それが爲に競爭會社が數多起つた。主としてモントリオールに於て起り

ました。然しその内にとう〳〵合同しまして、ノース、ウエースト、コンパニイといふものが一つ出來た。合同して之れにしたのです。ノース、ウエストといふ名はどういふ所から出たかと申しまするとゝ、語の通り詰り是は北西の拓殖といふことになる。ハドソン灣會社が之に手を着ければ出來ぬことはなかつたのであります。といふのは、かのマツケンジイの水脈、マツケンジイ河ですね、あれがアサバスカ湖から出て居ります。所で此アサバスカ湖から東へ向つてチアチルといふ河が出まして、數多の湖を珠數繋ぎに致して終にハドソン灣に落ちます。故にチアチル河、アサバスカ湖マツケンジイ河と聯結して進むでやればやれぬことはないのですが、手が廻らぬのです。で、此處を放つてをいた、さればカナダの廣漠なる此方面を一つやつて見やう、主としてアサバスカ湖表の經營、此處の拓殖、之をやつて見やうといふのでそれから名を取つてノース、ウエスト、コンパニイとしたのであります。これが一七八三年より翌年にかけての事で、アサバスカ湖表の經營に最先に當りましたのは有名なるアレキサンドルマツケンジといふ人でありまして。フオルトチペワヤンを置き、マツケンジ河を其北極洋の落口デルタまで始めて通航しまして、又其水源河であるピース河を遡つてロッキイ山脈を越ゑ、更に西へ進むで太平洋の岸までも踏破つて極めました。是は皆此ノースウエストコンパニイの事業であります。今日の所謂ブリチシコロムビアの基礎は此時に置きましたので、アラスカの境界が今日の如くきまつて居るのも亦たマツケンジとノースウエストコンパニイの力であります。此會社はハドソン灣會社と千八百二十一年に合同して一つのものになつた譯です。一つになつて仕事が段々伸びて來ました。之を合同した人はシムプソンといふ人です

それより斯うしてカナダ全國の經營に當ることになりました。斯樣に一つの營利會社からカナダといふ國家は起つてる。而して其營利といふのは毛皮集めの營利であります。そこから成り上りました。由來カナダは世界一飛切最上のビイベルを產しまして、之を以て物品交易の標準と致したことであります。近年に至り養狐業の起りましたのも畢竟ビイベルが酷く減少した爲かと存じまする。

以上はカナダの事を飛常な速力で飛ばしてしまつた譯であります。急行列車でありまする（笑聲）